



ニンフェアール第7回公演 笙とピアノ・映像の融合

2011年1月30日(日) 17:30開演(17:00開場)

◆会場： sonorium

◆共催：NymphéArt (ニンフェアール) / sonorium

出演：朝川万里 (ピアノ)、中村華子 (笙)
Mari Asakawa, piano Hanako Nakamura, shō

プログラム Program

1. 雅楽より：「盤渉調調子」笙ソロの為の

from Gagaku : *Banshikicho-no-choshi* for shō

2. 伊藤美由紀：「ホワイト・スパイラル」(2010/11) 笙とピアノの為の [世界初演]

榎沢順 (映像)

Miyuki Ito : *White Spiral* (2010/11) for shō and piano (WP)

Jun Kurumisawa : CGI Installation "MuPaOs"

3. 一柳慧：「雲の表情Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」(1985) ピアノソロの為の

Toshi Ichyanagi : *Cloud Atlas I,II,III* (1985) for piano

4. ジョナサン・リー：「Ascendant/Descendant (アセナダント/ディセナダント)」(2010/11)

笙とピアノの為の [世界初演]

エレイン・トマツィ・フレイタス (映像)

Johnathan F. Lee : *Ascendant/Descendant* (2010/11) for shō and piano (WP)

Elaine Thomazi Freitas : video

= 休憩 =

5. 今堀拓也：「光の層」(2010/11) 笙とピアノとライブエレクトロニクスの為の [世界初演]

中西宣人 (映像)

Takuya Imahori : *Layer of Lights* (2010/11) for shō, piano and electronics (WP)

Yoshihito Nakanishi : Interactive System "Prism Lights Overlay"

6. 高原宏文：「笙のためのアリア」(2006) 笙ソロの為の

Hirofumi Takahara : *Air for shō* (2006)

7. 伊藤美由紀：「色ならざる色」(2007) ピアノとエレクトロニクスの為の

Miyuki Ito : *Non-color Color* (2007) for piano with electronics

協力：千葉商科大学政策情報学部、早稲田大学国際情報科、筑波大学システム情報工学研究科、電気通信大学情報理工学部
助成：日本大学芸術学部個人研究費
後援：名古屋芸術大学音楽学部

協力スタッフ：早稲田大学国際情報通信研究科：小楠竜也、千葉商科大学政策情報学部：山口健人、青田慧斗、林敬子、福井早紀

本日はお忙しい中、ニンフェアール第7回公演にご来場頂き、有り難うございます。2005年の第1回演奏会から毎年続けられましたのも、ご来場下さる聴衆の皆様の暖かいご支援の賜物であり、心から御礼申し上げます。

今回の演奏会には、ニンフェアールの公演に関わっていただくのが2度目のピアニストの朝川万里さんと、雅楽の演奏とともに現代音楽にも貢献していらっしゃる笙の中村華子さんを迎えます。ピアノと笙という全く異なった文化、歴史のなかで育まれた楽器によるユニークな組み合わせから生まれる新たな音響の可能性を、IRCAM（フランス国立音響音楽研究所）に関わってきた伊藤美由紀、今堀拓也、ジョナサン・リーの3人の作曲家が各々の新作のなかで追求致しました。その3人の新作に対して、最新のテクノロジーを駆使した糊沢順、中西宣人、エレイン・トマツィ・フレイタスの3人の映像作家が異なった手段による視覚的な試みを行います。

演奏家、作曲家、映像作家によるコラボレーションで生み出される新たな芸術空間を、視覚と聴覚による体験によりご堪能下さい。

ニンフェアール

ニンフェアール：2004年設立。ニンフェとは、フランス語で睡蓮（すいれん）の意味で、ギリシア神話の乙女ニンフともかけてあり、またこのニンフという単語はさなぎという意味もあります。アールはフランス語で、アートを意味し、私達はこの団体名のもとに、美しく新鮮で、これからの可能性を秘めた芸術作品を皆様にご紹介したいと願っております。これらのニンフェアール公演は、愛知県内外で好評を博し、これまでに朝日新聞(2005、2006、2007)、モストリークラシック（2007）などの記事にとりあげられる他、発表された作曲メンバーの作品が、国内外（東京、ドイツ、デンマーク、アメリカ）で再演されるなど、一回の公演にとどまらない広がりを見せています。今回が初めての東京公演となります。nymphheart@yahoo.co.jp

[ニンフェアール過去の公演実績]

- ♪ ニンフェアール第1回公演:「古楽器の現在」
名古屋市港文化小劇場 2005年5月21日 名古屋市港文化小劇場との共催、名古屋市文化振興事業団企画公演、国際芸術フェスティバル参加公演
出演: ガース・ノックス(ヴィオラ・ダモーレ、ヴィオラ)、鈴木俊哉(リコーダー)
- ♪ ニンフェアール第2回公演:「林、森、虹、息-声と弦による贈り物」
名古屋市港文化小劇場 2006年5月13日 名古屋市港文化小劇場との共催、名古屋市文化振興事業団芸術公演
出演: 天羽明恵(ソプラノ)、鈴木大介(ギター)、後藤龍紳(ヴァイオリン)
- ♪ ニンフェアール第3回公演:「音とテクノロジーの対話」
愛知県芸術文化センター 2007年9月26日 愛知県芸術文化センターとの共催、「AACサウンドパフォーマンス道場」関連企画
出演: 八木美知依(箏)、エリオット・ガッテンニョ(サクソフォン)、カール・ストーン(ラップトップ・ミュージック)ほか
- ♪ ニンフェアール第4回公演:「音の身振り・動きの響き」
名古屋市千種文化小劇場 2008年5月30日 名古屋市芸術文化財団活動助成事業
出演: 多井智紀(チェロ)、太田真紀(ソプラノ)、朝川万里(ピアノ)、神田佳子(タップ)ほか
- ♪ ニンフェアール第5回公演:「息の領域」
名古屋市千種文化小劇場 2009年6月5日 名古屋市芸術文化財団活動助成事業
出演: カミラ・ホイテンガ(フルート)、森川栄子(ソプラノ)、糊沢順(映像インスタレーション)ほか
- ♪ ニンフェアール第6回公演:「ACTIONS」
名古屋市港文化小劇場 2010年5月29日 名古屋市港文化小劇場との共催、名古屋市文化振興事業団芸術公演
出演: 加藤訓子(打楽器)、ネイト・ペーゲル(ビデオ)、吉川敦(ライブ映像)ほか

1. 雅楽より：「盤渉調調子」笙ソロの為の

雅楽には現在6つの調が残っています。その中で盤渉調は西洋音楽の音階でいうとH(シ) 盤渉音を基音とした調です。昔は、音と色彩、方角、季節、などが関係づけられており、盤渉調は、黒(紫)、北、冬・・・などです。調子は、本来雅楽の合奏では、舞楽や管絃の曲を演奏する前に、その曲にあった調の調子を演奏します。各楽器がフリーリズムでカノン風に奏され、とても荘厳でまた混沌とした音世界になりますが、今回は笙1管で(しんみりと)お届けいたします。(中村華子)

2. 伊藤美由紀：「ホワイト・スパイラル」(2010/11)笙とピアノの為の [世界初演] 榎沢順 (映像/CGI Installation “MuPaOs”)

この作品を書き始めるにあたって、学生時代ニューヨークのコロンビア大学で笙奏者の宮田まゆみさんのレクチャー・コンサートのお手伝いをした際に、始めて笙を目の前でみた時のことを思い出しました。笙の音は、天にむかってスパイラル(螺旋)に駆け上っていくようなイメージで、西洋音楽との違いとして『スパイラル・タイム・コンセプト』というお話をして下さったのが記憶に残っています。スパイラルは、自然界、銀河、DNA分子など限りなく至る所に存在します。それゆえに、運動性、生命力をシンボルとして、時代を超えて、西洋建築、アートなどにも多々使用されています。繰り返しの構造でありながら同じ位置を通らず、無限に上昇していくという螺旋のイメージを、ピアノペダルの残響、笙奏者の声、息などを含めた『colored silence』(私の他の作品のなかでも追求しているアイデア『微妙な色合いを含んだサイレンス』)と微妙な音色で表現しました。タイトルの“ホワイト”は、色々な色の光が混ざった光の色から“白”は生まれるということに言及しています。(伊藤美由紀)

MuPaOsは映像ではない。常に空気の振動を音として読み取りカオス現象を表す数式によって写像された絵として出力されるライブペイントである。解かれた式はなんらかの形状を描き出すが、それとてコンピュータが何かを解釈してその形を描いている訳ではない。作曲家が聴こえた音を奏者や聞き手が解釈することで音楽となり、画家が観たイメージが色材によって定着し鑑賞者が解釈することで絵画となる。それらの間を繋ぐコンピュータは一切の解釈を行わず、今生まれた音を淡々とイメージに変換し、音と共に現れ消えて行く形や色を鑑賞者が解釈する何かとして産み出し続ける。たとえなにも解釈されなかったとしても、淡々と作曲家と画家たるもっとも純粋な何かが結合し産み出し続ける。(榎沢順)

3. 一柳慧：「雲の表情Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」(1985) ピアノソロの為の

数年前にこれらの曲を高松で演奏した時のことであるが、飛行機で目的地に向かう間、雲の上を飛ぶ飛行機の窓から真っ白な雲の様々な表情を見て、改めてその多様な表情に驚かされたことを覚えている。その時、改めて日本語には雲形を表す言葉が多いことにも気づき驚かされた。すじ雲、わた雲、うろこ雲、いわし雲、ひつじ雲、むら雲……。そして、雲は日本絵画史上にも古くから登場し、日本美術の世界において欠かせない重要な存在である。

この曲のなかに見る雲は、様々な速度、濃度、密度で流れ動いたかと思うと、突然の静止、予測された静止、規則的に連なる空間、不規則的に連なる空間によって変容し続ける。さらに、青空のなかの真っ白な美しい雲だけではなく、美しさの側面の表情も多様に変化する。「・・・人々に夢を起こさせてくれる雲の造形であるが、今日では一方で再び見ることの無いように祈る核爆発によるキノコ雲もあり、イメージは様々に重なりあって表情を変える」とは作曲者自身が書いたCDのライナーノートの一節である。ここでは、それらの表情はピアノの音と、音が造り出す空間のみによって表現され、華やかなピアノリズムと高度な技巧は雲の持つ豹変性を鋭く捉える。ピアノの持つ音色はこの曲の中で雲となって、我々の聴覚を魅了するのである。

又、ピアノの持つ幅広い表現力は、ペダルの役目によって跳躍されるということが、それほど一般的に認識されていないように思うが、これらの曲はペダルの深い可能性、繊細さを見いだすよう我々演奏者を導いてくれる。(朝川万里)

4. ジョナサン・リー：「Ascendant/Descendant（「アセダント／ディセダント」）」（2010/11）
笙とピアノの為の〔世界初演〕
エレイン・トマツィ・フレイタス（映像）

この作品は、主に対比的な経験の集積である。それらは、作品全体を通して繰り返し変容しながらフレーズの層となっていく。これらの断片は、映像と組み合わせることにより、聞き手に知っているような知らないような感情、連想を起こさせる。聴衆はそれぞれが感じた事をもとに、音楽との共有の空間を見つけるであろう。（ジョナサン・リー）

この映像は抽象的な記憶の集合として制作された。ほとんどの映像は動きがある境遇で撮影された。そのコンセプトは過去への旅と、強化する力とその結果によって築かれた過去によって組み立てられている。移動する感覚は、見届けた物事の変容によって徐々に置き換えられている。映像に刻まれた記憶は、必ずしも個人的な視覚的記憶に忠実ではない。それは、同じ本を2回目、3回目に読んだ時に異なった部分に気を引かれるようなものである。過去は一枚の紙で、その紙に我々は記憶を描いていく。色彩は時とともに変化するが、起こってしまった物語を変える事はできない。夢ある色彩を映像に取り入れることによって、日常的な知覚の展開から遠ざかることを試みた。（エレイン・トマツィ・フレイタス）

5. 今堀拓也：「光の層」（2010/11）笙とピアノとライブエレクトロニクスの為の〔世界初演〕
中西宣人（映像/Interactive System “Prism Lights Overlay”）

笙とピアノ、文化や歴史の違うこれら二つの楽器は、それぞれ異なる響きと時間の層を持っています。もともと私の音楽は時間軸の多層性を描く事が多いのですが、今回はそれぞれの楽器の持つ宿命的な差異を自然のまま活かし、エレクトロニクスによってそれらを融合することを試みました。線的な響きの笙、点的な響きのピアノから得られる視覚的発想のもとに、時の流れの中に拡散する光の幻想を描きます。生演奏のピアノの音をもとに、その場で加工されグラニューラーシセンスによって引き延ばされたエレクトロニクス音が重なり、ピアノと笙の二重の響きの層を橋渡しします。（今堀拓也）

笙・ピアノ・そして映像。組み合わせを聞いた際には、どのような映像を映し出すべきか悩みました。音・音楽を映像として可視化する - これは、音を背景として制作活動をしている私にとって、常に難しい問題です。今回は笙・ピアノの響きをイメージし、演奏に反応する光の像をプリズムによって反射させ、プロジェクタとプリズムによって、幾重にも重なる像を作り出すシステムを制作いたしました。この映像によって、音楽が作り出す空間を感じて頂ければ幸いです。（中西宣人）

6. 高原宏文：「笙のためのアリア」（2006）笙ソロの為の

この作品は2006年春に作曲し、其の年の日本現代音楽協会秋の音楽展で、高原聰子により初演された。千数百年に亘る雅楽の伝統の中で育まれて来た笙と言う楽器の世界に、21世紀の今、新しい何かを付け加えることは可能か？というのがこの曲を書くに当たっての私自身の課題であった。尚、曲中には2005年に逝った三女優の携帯から鳴っていた、サティ作曲《ジムノペディ第1番》の旋律の余韻が込められている。（高原宏文）

7. 伊藤美由紀：「色ならざる色」（2007）ピアノとエレクトロニクスの為の

萩焼の人間国宝、三輪壽雪の作品展覧会に行った際に、『白という色ならざる色』の、様々な表情、力強い美しさ、静寂のなかの魂みたくなものを感じ、感銘を受けました。それは、言葉では言い表すことのできない色、テクスチャー、存在でした。そんな複雑で様々な表情をもった色を音楽によって創造しようと試みています。コンピューターでのスペクトラ分析の応用から使用されている音構造、ペダルでのコントロールによるピアノの様々な音域での倍音の溶け合う音色、楽譜からのピアノ素材の録音サンプルを加工したエレクトロニクスと生演奏のピアノの音との微妙な音色の調和、低音の残響など、響きの可能性を追求しました。2007年の名古屋コンサートで世界初演をして下さった朝川万里さんが、今回も演奏して下さいます。（伊藤美由紀）

演奏 Performance

朝川万里 (ピアノ) *Mari Asakawa, piano*

ジュリアード音楽院に16才で入学し、ジョルジュ・シャンドール氏に師事。エール大学大学院を卒業後、イタリアのペスカラ音楽院にて伝説的ピアニストミケランジェリの高弟であるブルーノ・メッツェナー氏のもとで研鑽を積み、最優秀賞を得たのち、同音楽院を首席で卒業。フロレスター・ロソマンディ国際ピアノコンクール入賞。15才のときにニューヨーク・ウエストチェスターでグリーグの協奏曲を、続いてリンカーンセンターにてバッハの協奏曲を演奏する。以降、米国・ヨーロッパ・日本で演奏活動を行っており、昨今は現代音楽の分野も意欲的に取りあげている。イタリア、日本、イギリスを含む計10カ所でのプロコフィエフピアノソナタリサイタルや、イタリア、フランス、スイス、日本にて「ピアノが奏でる20世紀の音」と題するリサイタルを開催。新曲の初演にも積極的に取り組む。プロコフィエフ没後50年を記念してイタリアPhoenix Classics社からリリースされたプロコフィエフピアノソナタ：「戦争ソナタ6、7、8番」のCDは、派手なピアノイズムと評されがちなプロコフィエフの3大ソナタを、「奥に秘められた作品の豊かさを浮き彫りにしていく成熟度の高い演奏」「近年はやりの怒り肩のプロコフィエフとは一線を画している」と高く評価されている。東京生まれ。12才のときに家族と共にニューヨークに移り住んで以降、長い海外生活を経て、現在は拠点を東京に移す。愛知県立芸術大学非常勤講師。

中村華子 (笙) *Hanako Nakamura, sho*

国立音楽大学音楽学学位卒業。在学中より雅楽を学ぶ。笙を宮田まゆみ、多忠輝、楽琵琶を中村かほる、雅楽合奏を芝祐晴に師事。平成18年度文化庁新進芸術家国内研修生修了。現在「俗楽舎」に所属し、古典雅楽はもとより、現代の作曲家による作品にも取り組み、国内外で幅広く演奏活動を行っている。「ミュージック・フロム・ジャパン」「ウルティマ音楽祭」「アジア音楽祭」「北社国際音楽祭」「MITO音楽祭」「文化庁本物の舞台芸術」などに参加。

作曲 Music

伊藤美由紀 *Miyuki Ito, composer*

愛知県立芸術大学、マンハッタン音楽院修士課程、コロンビア大学博士課程修了。ピエール・シャルヴェ、トリスタン・ミュライク他に師事。文化庁芸術家在外研修員として、IRCAM(フランス国立音響音楽研究所)にて研鑽を積み、Boris & Edna Rapoport賞(NY)、名古屋文化振興賞、日本交響楽振興財団作曲賞入選、フランコ・エヴァンゲリスティ国際コンクール優勝(ローマ)など受賞。ハーモニアオペラカンパニー(NY)、東京オペラシティ、ミュージック・フロム・ジャパン(NY)、アタックシアター(ピッツバーグ)、オニックス・アンサンブル(メキシコ)などによる作品委嘱ほか、カーネギーホール、レゾナンス・フェスティヴァル(パリ)、ISCM世界音楽の日々(香港)、国際コンピュータ音楽会議(マイアミ)、SMC(ギリシャ/スペイン)、Re:New(デンマーク、バルセロナ)をはじめ、世界各国の現代音楽祭で作品が演奏される。ゲラルド・オーンタ助成とともにカリフォルニア・ジュニア・アーティストレジデンシー、国際交流基金助成とともにCMMAS(メキシコ国立音響研究所)にて創作活動を行う。「伊藤美由紀作品集:時の砂」がALCD-80からリリース。ミラノのスウィーニ・ゼルポーニ出版社から楽譜出版。ニンフェールと、日米作曲家グループ: JUMP(日米:新しい音楽の展望)企画代表。現在、名古屋芸術大学、千葉商科大学非常勤講師。www.miyuki-ito.com

今堀 拓也 *Takuya Imahori, composer*

玉川大学文学部卒業、パリ・エコールノルマル音楽院作曲科高等ディプロム課程修了。IRCAM(フランス国立音響音楽研究所)2005年度作曲科研究員。日本大学芸術学部音楽学助教授。作曲を平義久、ジャン＝リュック・エルヴェ、フィリップ・ルルー他に師事。ダルムシュタット夏季現代音楽講習会、サントルアカント夏季講習会、ロフイヨモン現代音楽講習会「新しき声」に参加。2001年オランダのガウデアムス賞を受賞。ドナウエッシンゲン音楽祭、ラジオフランス・プレザンス音楽祭、横浜みなとみらいホール委嘱 Just composed, ベルリン・ブランデンブルク放送公開録音演奏会 Musik der Gegenwartをはじめ、バーゼル、シュトゥットガルト、ローマなどで作品が演奏されている。
http://www.reverbNation.com/takuyaimahori

ジョンサン・リー *Johnathan F. Lee, composer*

デジタル・サウンド・アーティスト、作曲家。コロンビア大学で音楽の学士号、修士号、博士号を取得。現在、玉川大学芸術学部メディア・アーツ学科助教授。玉川大学着任前は、ニューヨークのコロンビア大学とアデルファイ大学で教える。作品の様式は多岐にわたり、器楽曲に加えて、信号処理技術を用いた独自の多層的なデジタル信号処理を特色とする電子音楽およびコンピュータ音楽作品を制作する。最近、特に振付家や画家など他分野の芸術家との共同作業に関心があり、そうして制作された作品はアジア、南北アメリカ、ヨーロッパで上演されている。また、コロンビア大学やフランスのIRCAM(フランス国立音響音楽研究所)では、音響やアート・テクノロジーの分野におけるソフトウェア開発など研究活動にも従事した。www.johnathanlee.com

映像 Visual Image

榎沢順 *Jun Kurumisawa / CGI Installation “MuPaOs”*

東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻卒業。コンピュータを用いて人間の持つ生理的な知覚を拡張する芸術手法を探っている。今までに触覚と絵画、音楽と絵画をテーマに作品発表を行う。ACM Sigraph、メディア芸術祭等に展示。現在、千葉商科大学政策情報学部教授。早稲田大学国際情報通信センター客員教授。美術解剖学会理事。ACM Sigraph会員。

中西宣人 *Yoshihito Nakanishi / Interactive System “Prism Lights Overlay”*

日本大学芸術学部音楽学情報音楽コース在籍時より、音楽的なコミュニケーションをテーマに、インタラクティブ・アート作品の制作を行う。現在、東京大学大学院 学際情報学府 荒川忠一研究室に所属。日本大学芸術学部長賞(学業部門)、社団法人日本音響学会 第一回学生優秀発表賞受賞。

エレイン・トマツィ・フレイタス *Elaine Thomazi Freitas*

音楽と作曲を原点に、テクノロジーの領域への歩みは、なだらかだが決定的であった。音楽におけるテクノロジーを一つの表現として捉え、芸術のコンセプトとして強いることをしていない。1997年にブラジル・リオデジャネイロ大学で修士を修得し、続いて2003にはコロンビア大学にて博士課程を修得した。IRCAM(フランス国立音響音楽研究所)インターンシップの後、現在はロンドン・メトロポリタン大学の講師を務める。www.thomazi.com

一柳慧 *Toshi Ichiyonagi, composer* : 日本の現代音楽を代表する作曲家の一人。1960~70年代ニューヨークでジョン・ケーージらと実験的音楽活動を展開し、日本にアメリカの前縁音楽を紹介した第一人者であるとともに、自らの偶然性の導入や図形楽譜を用いた作品でも、様々な分野に強い影響を与える。作品は国内外で演奏され、日本の伝統楽器を使用した作品にも力を入れ、独自の作風により現在も活躍している。現在、財団法人神奈川芸術文化財団芸術監督。

高原宏文 *Hirofumi Takahara, composer* : 1934年鳥取県生まれ。国立音楽大学作曲家卒業同専攻科修了。現在、日本現代音楽協会、日本作曲家協議会会員。国立音楽大学名誉教授。